

主要部を持たない日本語従属節

——「シテ」・「言ッテ」・「思ッテ」の不在——

大島 デイヴィッド 義和

名古屋大学

【要旨】 本論文では、従属節の主要部となるべき動詞『スル』、『言ウ』、『思ウ』の中止形が現れない特殊な従属節構造を取り上げる。これらの従属節構造が通常の中止形従属節構造には見られない意味的・統語的な制約を受けることを論じた上で、これらの制約を適確に捉え、なおかつ無形の動詞の存在を定立しない形式文法的分析を「記号に基づく構文文法理論 (Sign-Based Construction Grammar)」の枠組みを用いて提示する*。

キーワード： 主要部不在型構造、中止形従属節、引用構文、保持構文、構文文法

1. はじめに

日本語には、従属節の主要部となるべきテ形または連用形の動詞があたかも脱落したように見える現象が存在する。

- (1) ヒロシは赤ん坊を背に (して) 30 分ほどあたりを散策した。
- (2) a. ヒロシが「お早う」と (言ッて / 言い) 入ってきた。
b. ヒロシは「まさか」と (思ッて / 思い) 振り返った。

(1) において、名詞句「赤ん坊ヲ」および「背ニ」は、統語的・意味的観点から『散策スル』¹の補部とは考えにくい。したがって、「保持」を表す動詞——たとえば『スル』——の存在が期待され、また実際に「シテ」を補うことが可能である。

同様に、(2a, b) においては、動詞『入ル』『振り返ル』が発話や思考を表すものでないにも関わらず引用句と共に起しており、なぜ、『言ウ』『思ウ』といった発話・思考動詞が (明示的な形では) 存在しないにも関わらずこれらの文が適格となるのか、という問題が生じる。

本稿では、これらの特殊な構文——便宜上「スル不在構文」・「引用動詞不在構文」と呼ぶ——の文法的・意味的特徴を検証し、形式文法的なモデル化を行う。第2節

* 本稿は、The 22nd International Conference of Head-Driven Phrase Structure Grammar における口頭発表および同学会プロシーディングスに収録された論文 (Oshima 2015) の内容を発展させたものである。『言語研究』の2名の査読者の方からは、大変貴重なご指摘、ご意見をいただいた。また、上記学会の査読者・参加者ならびに秋田喜美氏からも、有益な助言を受けた。この場を借りて感謝申し上げたい。本研究は、日本学術振興会科研費 23720202 の助成を受けたものである。

¹ 語彙素 (lexeme) を指す際には二重かぎ括弧を用い、個別の表現 (語または句) と区別する。

では、記述的観点からこれらの構文の特徴を整理する。第3節では、これらの構文の統語的な取りあつかいに関する、既存の分析を概観する。第4節では、英語における「主要部の存在しない名詞句」およびこれに対する構文主義的な分析を紹介し、同様の分析を日本語における「主要部の存在しない従属節」に対して適用することを提案する。第5節では、SBCG (Sign-Based Construction Grammar, 記号に基づく構文文法理論) の枠組を用い、スル不在構文・引用動詞不在構文の文法的・意味的特徴を捉えた形式的な分析を提示する。

2. 2種の主要部不在型構文の特徴

本節では、スル不在構文・引用動詞不在構文の文法的・意味的性質を、先行研究における観察をふまえて整理する。議論の便宜上、以下では、両構文が(3)に示すような複文構造を持つものと仮定して、論を進める。X・Yは名詞句を、Qは引用句(直接引用句または間接引用句)を表す。αは主節の主語などを含む表現の列であり、語順によっては空となる。βは主節の述語などを含む表現の列である。∅は、単にテ形動詞が期待される位置に「音形を持った表現が現れない」ことを表しており、「音形を持たない表現(動詞)が存在する」ことを示すものではない。

- (3) a. [s α [s X ラ Y ニ ∅] β] (例: ヒロシは [赤ん坊を背に ∅] あたりを散策した。
 b. [s α [s Q ト ∅] β] (例: ヒロシが [「おはよう」と ∅] 入ってきた)

また、本稿では、「シテ」「言ッテ」「思ッテ」のような動詞が脱落(音形の削除)の対象となる、あるいはもともと音形を持たない形で存在するという立場はとらないが、説明の簡便のため、「明示的な主要部を持つ従属節を含む複文構造の代わりにスル不在構文または引用動詞不在構文を用いること」を「(述語の)脱落」と呼ぶ場合がある(ただし、真の意味での脱落と区別するため、常にカギ括弧をつける)。

2.1. スル不在構文

スル不在構文の性質については、村木(1983)および寺村(1983/1992)によって、充実した記述がなされている。寺村(1992: 124)が指摘するように、スル不在構文は、解釈の観点から「保持」の意味を含むものと、それ以外のものに大別できる。後者においては、従属節が、主節で記述された事態に対して時間・空間・手段など、いわゆる「付帯状況」の関係を持つ。

(4) 保持型

- a. 「石焼き芋」の声を聞き、**財布を片手に**部屋を飛び出した。
 b. **希望を胸に**新生活のスタートを迎えた。
 c. ヒロシは**赤ん坊を背に**30分ほどあたりを散策した。

(5) 付帯状況型

- a. 両超大国のつばぜり合いが、**チャドとスーダンを舞台に**激化している。

(村木 1983: 267)

- b. ソ連のアフガニスタン侵攻をきっかけに米国で防衛力増強の要望が高まった。(村木 1983: 267)
- c. 松田選手は**体力の衰えを理由**に引退した。
- d. 警察は**筆跡を手がかり**にメモを書いた人物を特定した。

付帯状況型スル不在構文は、その構成を $[\alpha [X \text{ヲ} Y \text{ニ} \emptyset] \beta]$ とした場合、 $[[\alpha \beta]Y \text{ハ} X \text{ダ}]$ 、あるいはそれに近い言い換えが可能である。

- (6) a. 両超大国のつばぜり合いが激化している舞台はチャドとスーダンだ。
- b. 米国で防衛力増強の要望が高まった(ことの)きっかけはソ連のアフガニスタン侵攻だ。
- c. 松田選手が引退した理由は体力の衰えだ。
- d. 警察がメモを書いた人物を特定した(際の)手がかりは筆跡だ。

保持型の場合も付帯状況型の場合も、スル不在構文には解釈を保ったまま「シテ」(動詞「スル」の連用形+助詞テ)を挿入することが可能である。「シテ」の有無に関わらず、ヲ格名詞句とニ格名詞句の順序は固定されている。

- (7) a. [財布を手{ \emptyset ／して／持って}] 部屋を飛び出した。
- b. [手に財布を{* \emptyset ／*して／持って}] 部屋を飛び出した。

一方、「XヲYニシテ」という形式の従属文があった場合、シテを「脱落」させることが常に可能なわけではない(寺村 1992: 122)。「脱落」を可能とする要件の1つは、シテが「保持」の解釈を受ける、あるいは従属節全体が「付帯状況」の意味を表すことである。

- (8) a. 離れをアパートに* (して), 人に貸した。
- b. 宣長は大平を養子に* (して), 本居家を継がせた。

(寺村 1992: 122; 一部改変)

また、保持型スル不在構文は、「XヲYニシテ」と比較して、「結果状態」解釈のみを許すという特徴を持つ。後述するように、テ形従属節構文は、典型的には、従属節で描写される事態 (E_1) が主節で描写される事態 (E_2) に対して先行して、または同時に、生起するという解釈 ($E_1 \leq E_2$) を受ける。しかしテ形従属節の述語が姿勢の変化、装着、取得などを表すものである場合、これとは別に、 E_1 の結果状態が E_2 を時間的に包摂するという、「結果状態」解釈が可能になる(日本語記述文法研究会 2008: 286-287, Oshima 2012)。(9) では、「カブリ」「カブッテ」が継起的解釈を受け、 E_1 および E_2 がともに、この発話にとってのトピック・タイム(発話を解釈する際に想定される時間的場面設定; Klein 1994)において生起したものと解釈される。一方、(10a) を自然に解釈した場合、 E_1 が生起した時点はトピック・タイムには必ずしも含まれず(「野球帽を身につけるという行為」は、「今朝」ではなく前日や数年前に生起したものであっても良い)、かわりに E_1 の結果状態——す

なわち、「野球帽を身につけている状態」——が、E₂を時間的に包摂していると解釈される。(10b)に示されているように、連用形は、テ形と異なりこの結果状態解釈を持たない²。

- (9) ヒロシは(まず)野球帽を{かぶり／かぶって}(次に)サングラスをかけた。
[継起的解釈]
- (10) ヒロシは風変わりな男で、いつ見ても野球帽をかぶっている。
a. 今朝も野球帽をかぶって竹井先生の講義を受けた。[結果状態解釈]
b. #今朝も野球帽をかぶり竹井先生の講義を受けた。

「シテ」が保持を意味するのは、「テ形の結果状態解釈」にあたり、連用形「シ」は同じ解釈を許さない。たとえば、(11a)では歌をうたう直前にヒロシが缶を手にとったと理解するのが自然だが、(11b)ではそれ以前の段階から(たとえば、ヒロシが話者の前に登場したときにすでに)缶を持った状態であったという解釈も可能である。

- (11) a. ヒロシは缶ビールを手にし歌をうたった。[継起的解釈のみ]
b. ヒロシは缶ビールを手にして歌をうたった。[継起的解釈または結果状態解釈]

保持を意味する[XヲYニ〇]は、[XヲYニシテ]と同様に結果状態解釈を許すが、さらに結果状態解釈のみを許すという特徴を持つ。

- (12) ヒロシは缶ビールを手にと歌をうたった。[結果状態解釈のみ]

スル不在構文は、他に、従属節内に主語が現れることがない(*[ZガXヲYニ〇])などの統語的特徴を持つが、これについては以下2.2節でふれる。

2.2. 引用動詞不在構文

引用動詞不在構文を扱った研究としては、寺村(1982)、藤田(1988, 2000)、鎌田(2000)、大島(2010, 2013)、金(2013)などがある。引用動詞不在構文に現れる引用句は、引用標識「ト」を伴う直接引用句であることが一般的だが、「ト」の

² 報道文の見出しなどでは、例外的に連用形が結果状態解釈を受ける場合がある。

- (i) (日本放送協会「NHK NEWS WEB」2015年10月6日記事より；強調を追加)
a. 首相「原子力災害政府が責任**持ち**対処」(見出し)
b. [...]安倍総理大臣は、「万が一、原発事故が起き、災害になってしまうような事態が生じた場合、国民の生命や財産を守ることは政府の重大な責務で、責任を**持って**対処する」と述べました。(本文)
- (ii) (東京新聞「TOKYO Web」2016年3月5日記事より；強調を追加)
a. 乗客**乗せ**ジェットコースター停止(見出し)
b. [...]「富士急ハイランド」で1日、ジェットコースターが乗客7人を**乗せたまま**、高さ約40メートルの地点で停止するトラブルがあった[...] (本文)

かわりに「ッテ」が用いられることもあり、また（「ト」または「ッテ」を伴う）間接引用句が現れる場合もある。

引用動詞不在構文には、『言ウ』のテ形または連用形（「言ッテ／言イ」）を挿入した形での言い換えを許すものと、『思ウ』のテ形または連用形（「思ッテ／思イ」）を挿入した形での言い換えを許すものがある。以下、それぞれを「言ウ不在構文」・「思ウ不在構文」と呼ぶ。また、テ形と連用形をあわせて「中止形」と呼ぶ。

なお、(13)・(14)のような文は、言ウ不在構文としての解釈も許すが、それとは別に実際には発言が行われていないという解釈も可能である（大島 2013: 126-127）。

- (13) a. 「こっちに來い」と手招きした。
 b. 「あれを見ろ」とあごをしゃくった。
- (14) a. 「俺がボスだ」と威張りちらした。
 b. 「男に二言はない」と約束通り土下座をした。

(13) は、前者の解釈では「『こっちに來い』と言って手招きした」のような言い換えが可能だが、後者の場合、「『こっちに來い』と言うかわりに手招きすることで同等のメッセージを伝えた」のような意味合いになる（『こっちに來い』と思って手招きした」という言い換えも適当ではない）。すなわち、ト引用句がジェスチャーの意味合いを説明する機能を持つ。(14) は、実際に「俺がボスだ」「男に二言はない」と言う発言が行われたという解釈とは別に、「『俺がボスだ』と言わんばかりに威張りちらした」「『男に二言はない』と言わんばかりに約束通り土下座をした」と言い換え可能な解釈も許す。「と言わんばかりに」という表現は「とばかりに」という形に縮約されることがあるが、縮約がさらに進んで「と」だけが残ったものであろう。これらの「擬似引用構文」については、以下では議論の対象としない。

『言ウ』『思ウ』の中止形を主要部とする従属節があったとき、それに替えて引用動詞不在構文を用いること（「言ッテ」等を「脱落」させる）は、必ずしも許容されない。「脱落」が阻害される要因には、意味に関わるものと、統語的なものがある。前者についてまず述べると、引用動詞不在構文が許容する解釈の幅は、中止形従属節が許す解釈の幅と類似するものの、より制限されている。中止形従属節構文は、さまざまな解釈を持ち、その代表的なものとして以下の4つを挙げることができる³。

- (15) **同時生起**
- a. 右手で天を指し（て）、左手で地を指した。
 b. 急に気温が{下がり／下がって}、風も強くなった。

³ 以下、いくつかの例文では、中止形の代表としてテ形のみを用い、連用形を用いたヴァージョンを省略する。例文によっては、連用形を用いた場合に若干の不自然さが生じるが、これは連用形従属節に文体的な改まりの度合いが高く、日常会話的な場面にそぐわないことに起因すると考えられる。

(16) 先生生起

- a. 歯を{磨いて/磨き}, ひげを剃った。
- b. ヒロシがボールを{投げて/投げ}, ケンが受けとめた。

(17) 手段

バスに{乗って/乗り}, 会社に行った。

(18) 理由

石に{つまずいて/つまずき}, 転んだ。

意味分析上の1つの争点となるのは、中止形従属節の伝達する意味のうち、どの部分を「字義的意味」に由来するものとし、どの部分を「会話的推意 (conversational implicature)」として捉えるか、という問題である。説明の経済性の観点からもっとも好ましく、また比較的広く受け入れられている見解は、中止形従属節構文は、単に論理的連言を表し、主節とのあいだに成立する種々の意味関係——同時・継起・手段・理由など——は、すべて会話的推意として導出される、というものである (Fukushima 1999, 日本語記述文法研究会 2008, Lee and Tonhauser 2010 など)。しかし、Nakatani (2003), Oshima (2012), 吉永 (2012), 金 (2013) などで指摘されているように、中止形従属節内で記述される事態 (E_1) が主節で記述されるもの (E_2) より後に成立する ($E_1 > E_2$) という解釈は一般に容認されず⁴、これを単に会話的推意の影響によるものとみなすことは難しい。

- (19) a. ヒロシは銀座のデパートで万年筆を買って、その万年筆を父に贈った。
- b. ?#ヒロシは父に万年筆を贈って、その万年筆を銀座のデパートで買った。
- cf. ヒロシは父に万年筆を贈った。彼はその万年筆を銀座のデパートで買った。

そこで、本稿では、中止形従属節構文は、「 E_1 が E_2 に対して時間的に先行するかあるいは重なる」という内容を字義的意味の一部として持ち、手段・理由といったその他の意味関係は会話的推意として読み取られるものである、という立場をとる。

(15) - (18) に示した中止形従属節の4つの「解釈」は、従属節主要部が「言ッテ/言イ」「思ッテ/思イ」の場合にも当然観察される。

(20) 同時生起

「誰かいますか?」と (言ッて/言イ) ドアを叩いた。

(21) 先生生起

「それではまた明日」と (言ッて/言イ) 部屋を出て行った。

⁴ただし、中止形従属節の内容と主節の内容にはっきりとした対比が感じられるときには、 E_1 が E_2 に後行する解釈が許容されるようになる (Nakatani 2003: 383-384, Oshima 2012: 301-302, 吉永 2012: 118)。5.1 節を参照。

(22) 手段

- a. 「お前が行け」と（言って／言い）ヒロシに書類を取りに行かせた。
- b. 「誰にでも失敗はある」と（思っで／思い）自分を慰めた。

(23) 理由

- 「もうどうせ間に合わない」と（思っで／思い）走るのをやめた。

しかし、中止形従属節に代えて引用動詞不在構文を用いた場合には、解釈がより制限される。まず、引用動詞不在構文は、継起解釈を許容するものの、思考・発話と明示的に現れる述語の表す事象の生起が時間的に離れている場合には、不適格となる（藤田 2000・他）。

- (24) a. 太郎は「今忙しい」と言っで、やがて電話を切った。
- b. #太郎は「今忙しい」と、やがて電話を切った。（藤田 2014: 42-43）
- (25) a. ヒロシは「まずはこれを見てくれ」と {言っで／∅}, バッグから報告書
 をとりだした。
- b. ヒロシは「じっくり考えさせてくれ」と {言っで／#∅}, 30 分後によく
 やく回答用紙を提出した。
- (26) (5 時ごろ藤川君のアパートに行っでみたが、留守だった。)
- a. 「すぐに戻っでくるだろう」と {思っで／∅} ドアの前でぼんやりして
 ると、ほどなくして買っ物袋を抱えた藤川君が階段をのぼっできた。
- b. 「あとでまた来てみよう」と {思っで／#∅} 30 分後に再び訪ねてみると、
 今度はドアが半開きになっでいた。

次に、従属節と主節のあいだに「理由」関係が成立する場合には「言ッて／言イ」を「脱落」させることができない（大島 2010, 2013, Oshima and Sano 2012）。

- (27) a. ヒロシは「太りましたね」と {言っで／#∅} ユミを啞然とさせた。[理
 由関係が成立]
- b. ヒロシは「太りましたね」と {言っで／∅} ユミの腹をつついた。[理由
 関係が不成立]

一方、(23)・(28) に示されるように、思ウ不在構文は「理由」関係が成立する場合でも用いることができる。

- (28) 「どうせばれないだろう」と {思っで／∅} 手抜きをしたら、あとで大目玉を
 くらった。
 [（「どうせばれないだろう」という思考と手抜きをしたことのあいだに）理
 由関係が成立]

大島（2010, 2013）および Oshima and Sano（2012）では、以下のような例に基づき、思ウ不在構文に関して、「手段」または「理由」関係が成立する場合にのみ用いる

ことができるという主張がなされている。

(29) (野球観戦をしていて、ひいきのチームが優勢に試合を進めてきたが、最終回到ピンチを迎える。)

「なんだか雲行きがあやしくなってきたな」と{思っ~~て~~／??}観戦していると、結局スリーランホームランが飛び出して逆転負けを喫してしまった。

(大島 2013: 123)

しかし、(30b)・(31b)のような例は、「手段」・「理由」関係が成立していないが、必ずしも不適格とは言えない。

(30) a. 「どうせ小銭しか入っていないだろうな」と思って募金箱を開けたら、なんと1万円札が入っていた。

b. (?)「どうせ小銭しか入っていないだろうな」と募金箱を開けたら、なんと1万円札が入っていた。

(31) 男の子は、こんどこそお母さんによるこんでもらえると、帰ってきました。
(「北風がくれたテーブルかけ」『名作よんでよんで世界のむかし話 20 話』学研教育出版)

また、たとえば (32) に示されているように、「理由」関係が成立している場合でも、「思ッテ」の「脱落」が不自然さにつながることもある(思~~う~~不在構文全体を従属節として埋め込んだ (32c) は、容認度が比較的高くなるように思われる)。

(32) a. 「そろそろ降り出しそうだな」と思って洗濯物を取り込んだ。

b. ? 「そろそろ降り出しそうだな」と洗濯物を取り込んだ。

c. (?) 「そろそろ降り出しそうだな」と洗濯物を取りこもうとした矢先に、激しく雨が振りだした。

思~~う~~不在構文が適格となる条件についての一般化——たとえば、なぜ (32b) が不自然なのか——については、今後の検討が必要だが、「理由」および「手段」関係の有無は、思~~う~~不在構文の適格性を直接左右するわけではないと考えられる。

続いて、統語的な制約について述べる。まず、「言ッテ／言イ」「思ッテ／思イ」の「脱落」が可能なのは、引用句——これは直接引用句の場合も、間接引用句の場合もある——以外の補部(副詞類を含む)が、従属節内に現れない場合に限られる。

(33) a. ***大声で**「誰かいませんか」とドアを叩いた。(藤田 2000: 75)

b. ***ヒロシは僕に**「じゃあな」と出ていった。(大島 2013: 125)

ただし、従属節の主語が、主節の主語と同一指示であることは、必須条件ではない。許容されないのは、あくまで、明示的な主語の生起である。

- (34) a. 「お待ちどおさま」と（言って）そばが置かれた。
 b. 主人が「お待ちどおさま」と言ってそばが置かれた。
 c. *主人が「お待ちどおさま」とそばが置かれた。

(大島 2013: 125；表記を一部変更)

- (35) (マコトとサルは失踪した女性を捜している。サルが失踪直前に女性と通話した際の状況を説明している。)

マコト「そのあとどおするとか言ってなかった？」

サル「ウルセー、バカザルには関係ネーって〔（言って、通話が）〕切れた。」

(『宮藤官九郎脚本・池袋ウエストゲートパーク』角川書店；表記等変更)

同様の統語的制約は、やや容認性判断が難しいものの、スル不在構文にもあてはまるようである。

- (36) a. [ロープを手に{して/∅}], 振り落とされないように踏ん張った。
 b. [ロープをしっかりと手に{して/∅}], 振り落とされないように踏ん張った。
 (37) a. ヒロシは[リュックサックを背に{して/∅}], バスが来るのを待っていた。
 b. ヒロシは[重そうにリュックサックを背に{して/∅}], バスが来るのを待っていた。

保持型スル不在構文では、従属節主語と主節主語は必ず同一指示となる。これは結果状態解釈を受けるテ形従属節に、一般的にあてはまる制約である。たとえば、(38)は先行生起や同時生起の解釈を許すが、結果状態解釈は許容しない（ヒロシの「帽子をかぶるという行為」は、ユミの「写真を撮るという行為」と同じ時間的場面で生起したものと解釈される）。

- (38) ヒロシが帽子をかぶって、ユミがその姿を写真に撮った。

付带状型スル不在構文の場合、何を従属節の主語とみなすべきか（そもそも主語が存在するのか）ははっきりしないが、やはり主語が従属節内に明示的に出現することはない。

次に、引用動詞不在構文の従属節内のト引用句には、「ダケ」「サエ」といったとりたて助詞を伴わせることができない（藤田 2000: 103, 金 2013: 62）。

- (39) a. 「失礼しました」と{だけ/さえ}言った。
 b. 「失礼しました」と{だけ/さえ}言って、部屋を出て行った。
 c. *「失礼しました」と{だけ/さえ}, 部屋を出て行った。

スル不在構文の場合、二格名詞句はとりたて詞を伴わせることができないが、これは「脱落」の無い構文にも共通する性質である。

- (40) a. 荷物を片手に (して) 歩いた。
 b. *荷物を片手 {だけに/にだけ} (して) 歩いた。
 cf. 荷物を片手 {だけに/にだけ} 持って歩いた。

一方、ヲ格名詞句には、とりたて詞を伴わせることが可能である。

- (41) 財布だけを手に (して) 部屋を出て行った。
 (42) 前人未到の記録を、1つとは言わず2つ、3つと打ち立てたい。そのような野望さえ胸に (して)、杉山は日々トレーニングに励んでいた。

3. 2種の主要部不在型構文の成り立ちと構造——既存の分析の概観——

スル不在構文・引用動詞不在構文は、「文法的・意味的観点から生起することが期待される表現が、明示的に生起しない」という性質から、一部の先行研究（後述）では、広義の省略現象の一種として扱われてきた。しかしながら、近年の理論的研究において省略 (ellipsis) という用語は、一般に、「明示的な表現と対応しない意味要素が、先行文脈の情報に基づいて解釈上補われる」現象を指す (Merchant 2001, 2010, Culicover and Jackendoff 2005: 233–300, van Craenenbroeck and Jason Merchant 2013 など参照)。したがって、先行文脈に関わらず解釈が可能な主要部不在型構文は、一般的な意味での省略には該当しない。本稿でも、2種の特殊構文を省略現象とみなさず、「省略的構文」のような名称を用いることもしない。

一方で、省略現象と、主要部不在型構文のあいだの異同を検討し、前者に対する既存の議論を参照することは、後者の性質の記述に際して有用であると考えられる。以下、本節では、省略という現象についての2つの捉え方（統語論的アプローチと意味論的アプローチ）を簡単に解説した上で、2種の主要部不在型構文の成立過程と構造をめぐる既存の議論を概観する。

一般的な意味での省略現象——たとえば、(43) に示した英語の動詞句省略 (VP-ellipsis) や、(44) に示した日本語における非中位型右方節点繰上げ (non-medial right node raising) 構造——においては、非明示的要素 (省略要素) の理解は、文中あるいは談話中の「先行詞」に依拠して行われる。

- (43) (“Do you like tomatoes?” に対する回答として)
 No, I don’t (like them).
 (44) ヒロシがカレーライスを (食べ)、ユミがうどんを食べた。

このような省略現象の分析は、省略要素の位置に表現および文法構造が存在すると考えるもの（統語論的アプローチ; Merchant 2001, Aelbrecht 2010, van Craenenbroeck 2010 など）と、存在しないと考えるもの（意味論的アプローチ; Dalrymple et al. 1991, Ginzburg and Sag 2000, Culicover and Jackendoff 2005 など）に、大別できる。統語論的アプローチでは、たとえば発話 (43) において、(i) *like them* に相当する本動詞句が音形を持たない形で存在している、あるいは、(ii)

そのような動詞句が文法的派生の一段階で生成されるが、その後削除される、という仮定が導入される。一方、意味論的アプローチでは、(43)の統語構造には本動詞句（を持つ派生段階）は存在しないと考える。意味論的アプローチをとる場合、文法規則をより柔軟に規定し、たとえば「助動詞1語からなる動詞句」や「述語要素を含まない節」を生成可能にする必要が生じる。

省略要素の文法レベルでの存在を認めるかどうかは、個別の文法現象ごとに議論されるべき問題である。たとえば、英語の動詞句省略では、(省略された)動詞句からの要素の取りだしが可能であり、また、この取りだしは文法的な「島の制約」の対象になる。これは内部構造を持つ本動詞句の存在を仮定する根拠となる。

- (45) a. I know which books you like and **which ones** you don't.
 b. Potatoes I like, but **tomatoes** I don't.
- (46) a. *She bought a big car, but I don't know **how big** she did. (Merchant 2008: 138)
 b. *She bought a big car, but I don't know **how big** she bought [a _ char].

対して、スルーシング (sluicing) と呼ばれる省略現象においては島の制約の影響が見られず、これは意味論的アプローチの妥当性を支持する根拠となる。

- (47) She bought a big car, but I don't know **how big**. (Merchant 2008: 136)

スル不在構文および引用動詞不在構文に関しても、音形を持たない動詞の存在を仮定する分析と、仮定しない分析が考えられるが、経験的観点からそのどちらがより適切かを判断する決定的な根拠は見当たらない。ただし、音形を持たない動詞が存在するとした場合、引用動詞不在構文におけるそれが、テ形動詞なのか、それとも連用形動詞なのかを決定できないという擬似的曖昧性 (spurious ambiguity) の問題が生じることは、1つのデメリットとして指摘できる。本稿では、音形を持たない要素の存在を極力認めるべきではないという理念に基づき、後者の立場をとる。

次に、2種の主要部不在型構文が(48a, b) (≈ (3a, b))のような複文構造を持つのか、それとも単文構造を持つのか、という問題を検討する。

- (48) a. [s ... [s X ヲ Y ニ Ø] ... Pred]
 b. [s ... [s Q ト Ø] ... Pred]

スル不在構文について、村木(1983: 267)は、[X ヲ Y ニ]が「全体で文の成分を構成」するものとみなし、また「発生的には、おそらく[...]「シテ」が省略されて成立したものであろう」と述べているが、共時的観点から複文構造を認めるか否かについては見解を示していない。寺村(1983/1991)もこの点について同様である。(49)のような構造は、一見奇異に映るものの、イディオムの構造としてありえないものとは言えない。

- (49) [s ... [AdvP X ヲ Y ニ] ... Pred]

一方, Martin (1975: 471) では, スル不在構文は「シテ」の脱落 (dropping) によって成立するものと捉えている。また, Dubinsky and Hamano (2003) では, [X ヲ Y ニ] を副詞節の一種とみなすものの, (i) [X ヲ Y ニシテ] が TP であるのに対して, [X ヲ Y ニ] はニを主要部とする AspP であり, (ii) 両構造のあいだに派生関係は存在しない (後者からシテが脱落したことで前者が成立するわけではない), とする分析を提案している。

引用動詞不在構文については, 鎌田 (2000), 大島 (2010, 2013), Oshima and Sano (2012), 金 (2013) などで複文構造の存在が主張あるいは想定されているのに対し, 藤田 (1988, 1999, 2000) は複文構造を認めず, ト引用句が明示的に現れる唯一の述語に対して副詞的に係るという立場をとる。藤田は, 日本語の引用構文を, 引用句によって描写される発言・思考が主節の述語によって描写される動作・状態と事実上等しいと解釈されるものと, 引用句によって描写される発言・思考が主節によって描写される動作・状態に伴って生起すると解釈されるものとの2つに分類することを提案し, 前者を第I類構造, 後者を第II類構造と名づけている。

(50) **第I類** 述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す。引用句は述部に対して, 様態修飾句的な関係に立つ。

第II類 述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。引用句は述部に対して, 並列述語的な関係に立つ。

第I類と第II類は, それぞれ, 一般的な引用構文と引用動詞不在構文にほぼ相当する⁵。藤田は, ト引用句は, イコン記号であるゆえにそれ自体で発話・思考行為を表す「述語的表現性」を持ちうるとし, 第II類構造においては, ト引用句が, その述語的表現性によって, 統語レベルでは副詞的存在でありながら「並列述語」——本稿でいう「連用形従属節またはテ形従属節の主要部となる述語」——と同様のはたらきをなすと主張する。藤田の想定する単文構造は以下のように図示できる。

(51) [s ... [AdvP Qト] ... Pred]

大島 (2010, 2013), 金 (2013) らが複文分析を支持する主要な根拠は, 2.2 節で見たように, 引用動詞不在構文と中止形従属節構文の解釈の幅に符合が見られるというものである。たとえば, 引用動詞不在構文で描写される発話・思考は, 明示的に現れる述語が描写する事態に対して時間的に後行するとは解釈できないが, これ

⁵ ただし, 藤田の第I類は (i-a, b) のような文を含む (藤田 2000: 100)。

- (i) a. カズヒロは「そんなこと知るもんか」と開き直った。
- b. マコトは「そうします」と実行を約束した。

(i) を, 通常の引用構文とみなすためには, 述語『開キ直ル』がト引用句を補部として選択しうると想定する必要がある。また, (ii) を通常の引用構文とみなすためには, 述語『約束スル』が, ヲ格目的語とト引用句の2つを補部として同時にとりうると想定する必要がある。このような想定を受け入れるべきか否かは慎重な検討を要する問題である (大島 2013)。

は中止形従属節構文の持つ一般的な意味特徴 ($E_1 \leq E_2$) の現れであると理解できる。しかし、このような観察は、単文説を決定的に反証する性格のものではない（藤田 2012, 2013, 2014 による、これらの研究に対する反論もあわせて参照）。

以上で見たように、スル不在構文・引用動詞不在構文ともに、複文的分析と単文的分析とが考えられる。複文的分析をとる場合、従属節における主要部の不在を説明する必要が生じるが、これについては (i) 主要部が任意的な脱落（音形削除）の対象となる（Martin 1975, 鎌田 2000, 大島 2010, 2013）、(ii)（スル不在構文の従属節において）一見主要部とは思われない「ニ」が主要部である（Dubinsky and Hamano 2003）、(iii)（引用動詞不在構文の従属節において）意味的に『言ウ』『思ウ』の上位語となる動詞が音形を持たないかたちで存在（「潜在」）している（金 2013）、といった分析が提案されてきた。一方、単文的分析をとる場合、「なぜ、述語が1つしか存在しないのにも関わらず、2つの別個の事象が表現されるのか」、という疑問に答えなければならない。これに対し、藤田（2000・他）は、引用動詞不在構文においては、ト引用句自体がその「述語的表現性」ゆえに述語に類するはたらきをするという説を提示している。

これらの提案はいずれも一定の説明力を有するが、述語を脱落させる文法的操作が存在する、あるいは無形の述語が存在する、とする分析は、音形を持たない要素をなるべく想定すべきでないという原則を考慮すれば、好ましいものとは言えない。また、通常格表示的な役割をになう「ニ」自体が保持・存在を表す述語となるという分析にも、独立した根拠が乏しいように思われる。本稿では、これらの案をとらず、なおかつ「2つの別個の事象が言語的に表現された場合、それぞれに異なる節が対応する」という一般法則からの逸脱を認めない——すなわち、複文構造を想定する——分析を、構文文法の枠組みを用いて提案する。

ただし、本稿の分析は、引用動詞不在構文の成立の背景に、ト引用句の特異な性質（アイコン記号的性質）があるとする藤田の主張と矛盾するものではない。引用動詞不在構文以外でも、引用が行われているにも関わらず発話・思考動詞が現れないことはよく見られる（大島 2010, Oshima and Sano 2012）が、これは、一般に引用標識を含む引用句が伝達する表現内容に対して発話・思考動詞のそれが相対的に希薄であるゆえと考えられる。

- (52) a. （電話での会話を終えた人物が、かたわらの知人に対してしかめ面を見せて）
菊池さん、やっぱり来られないって。
- b. （秘書が、上司に対して）
部長、そろそろお時間かと。

同様に、「(Zガ)XヲYニスル」の形式が取得（保持）を表す場合、その意味内容は、概略XがYの位置に移動する（存在する）というものであり、動詞『スル』自体の意味は希薄である。「言イ／言ッテ」「思イ／思ッテ」「シテ」の意味の（補部と

比しての相対的な) 希薄性が, スル不在構文・引用動詞不在構文の成立に関わっているのは, 間違いのないところであろう。

4. 英語における「主要部となる名詞を持たない名詞句構造」との比較

スル不在構文および引用動詞不在構文は, 出現が期待される文中の述語要素が明示的に生起しないという点で, 日本語の右方節点繰上げ構造や, 英語の空所化 (gapping) によって生じる構造と, 表面的に類似する。

- (53) a. ヒロシがカレーライスを (食べ), ユミがうどんを食べた。(= (44); 右方節点繰上げ構造)
 b. John likes tomatoes and Mary (likes) potatoes. (空所化)

一方, 前節冒頭で述べたように, スル不在構文・引用動詞不在構文は, 省略構造とは異なり, 文脈的な情報に依存せずに省略要素の意味が復元されるという特徴を持つ。この点で, 両構文は, (54)・(55) に例示された, 英語における「主要部となる名詞を欠く名詞句構造」(Pullum 1975, Lyons 1991, Payne and Huddleston 2002, Fillmore et al. 2012, Arnold and Spencer 2015) と類似を見せる。Fillmore et al. (2012: 357-360) に依拠し, (54) の構造を Adjective-as-nominal.Human 構造, (55) の構造を Adjective-as-nominal.Abstract 構造と呼ぶ。

- (54) a. **The French** smoke too much. (Lyons 1991: 99)
 b. **The rich** exploit **the poor**, and **the poor** exploit **the poorer**.
 c. John writes books for **the (very) young**.
 d. This school has a special program for **the intellectually gifted**.
 e. It is the duty of the Government to care for **our poor, our unemployed**. (Quirk et al. 1985: 423)
 f. Most of **Asia's newly rich** are simply the first winners in a rush to own markets (Arnold and Spencer 2015: 47)
- (55) a. We are going to attempt **the utterly impossible**. (Payne and Huddleston 2002: 417)
 b. This is verging on **the immoral**. (Payne and Huddleston 2002: 417)
 c. The artist shows us **the familiar** as if it were new. (Fillmore et al. 2012: 360)

これらの構造に参与する形容詞は, 一見, 品詞転換によって名詞として機能しているようにも見えるが, 副詞 (*very, intellectually, utterly*) による修飾や比較級 (*poorer*) への変化を許すことなどから, 形容詞としての性質を保っていると考えるのが自然である。スル不在構文・引用動詞不在構文と (文脈依存的な) 省略構文とのあいだの関係は, Adjective-as-nominal.Human 構造・Adjective-as-nominal.Abstract 構造と (56) に示すような (狭義の) 名詞省略とのあいだの関係と, 平行的である。

- (56) a. I ate two sandwiches, and Bill ate **three** (sandwiches).

- b. I bought the most expensive bike, and Chris bought **the cheapest** (bike).
- c. I prefer the French restaurants in this town to **the Greek** (restraurants).
(Pullum 1975: 174)
- d. Lucie likes young dogs, but I prefer **old** (dogs).
(Payne and Huddleston 2002: 417)

Adjective-as-nominal.Human 構造は, (i) 複数名詞句として機能し, (ii) 人間を指すと解釈され, なおかつ (iii) 総称解釈を受ける (ただし, Lyons (1991) で指摘されるように, *French* のような一部の国・地域形容詞の場合, 非総称解釈も許容される)。性質 (iii) は, 「*the* を伴う複数名詞句は総称解釈を持たない」という一般原則に対する, 興味深い例外となる。(54) において *people, children* といった複数名詞を形容詞のあとに追加した場合, 総称解釈は得られなくなる。一方, Adjective-as-nominal.Abstract 構造は, 単数名詞句として機能し, 抽象的な概念を指すと解釈される。また, その解釈は, 定冠詞を伴うにも関わらず, 不定名詞句のものに近い。すなわち, 形容詞のあとに *thing, deed* といった名詞を追加した場合には文意が大きく変わるが, あわせて *the* を *a(n)* に置き換えた場合には比較的近い意味が得られる (*the utterly impossible* ≈ *an utterly impossible {thing/deed}*)。

Fillmore et al. (2012: 358–360) は, これらの構造に対して, (57)・(58) に示した構文文法理論的な分析を提案している (構文文法理論の特徴については後述) ⁶。

(57) {^{NP,plural} [^{the}] [^{AP}] }

Name	Adjective-as-nominal.Human
Mother	NP, plural, generic reference
Daughter 1	<i>the</i>
Daughter 2	an AP describing a property of people

(58) {^{NP} [^{the}] [^{AP}] }

Name	Adjective-as-nominal.Abstract
Mother	NP, singular. Refers to an unspecified or generic entity with the properties of Daughter 2
Daughter 1	<i>the</i>
Daughter 2	AP

⁶ ただし, (57) における記述は, 以下のような観察に合致しない点で不十分なものであることが, Arnold and Spencer (2015) によって指摘されている。

- (i) a. 第一要素として, *the* 以外の決定詞 (ただし [+definite] のものに限る) が現れる場合がある (例: *Asia's rich*)。
- b. 第二要素が, 形容詞類による修飾を受けることが可能である (例: *the undernourished poor*)。

このような観察に基づき, Arnold and Spencer (2015) は, 形容詞句が [+definite] の決定詞と義務的に結合する名詞表現を構成するという分析を, 代替案として提示している。

Fillmore et al. による分析の1つの特徴は、名詞句の主要部として働く、非明示的な名詞の存在を仮定しないという点である⁷。Adjective-as-nominal.Human 構造・Adjective-as-nominal.Abstract 構造と、スル不在構文・引用動詞不在構文には、以下の共通点があり、後者に対しても、構文文法理論的な分析が有効であると考えられる。

- (59) a. 非明示的要素の意味解釈のために、文中・談話中の言語的な先行詞が必要とされない。
b. 非明示的要素を明示的な表現で補った場合、解釈の幅に違いが生じる。

Fillmore et al. にならい、スル不在構文、引用動詞不在構文の従属部の性質をインフォーマルな形で記述すれば、以下の様になるだろう。

(60) {^S [^{NP}] [^{NP}] }

Name	スル不在構文
M	副詞節。(i) 主節主語が表す事物が、D1 が表す事物を、D2 が表す事物の位置に保持しているという事態を表すか、または(ii) 主節が表す事態にとって、D1 が表す事物が、D2 が表す事物(理由など)に相当することを表す。
D1	事物を表すヲ格名詞句
D2	位置、または理由などを表すニ格名詞句

(61) {^S [^{QuotP}] }

Name	引用動詞不在構文
M	副詞節。D が表す内容を持つ発言ないし思考が行われるという事態を表す。
D	引用句

言うまでもなく、これらは極めて単純化した記述であり、これらの構文が持つ意味的性質を適切に捉えてはいない。また、単に副詞節(連用従属節)を構成すると述べただけでは、明示的な中止形動詞を主要部とする従属節の特徴と、「主要部不在型従属節」の意味的共通性——つまり、「言イ/言ッテ」、「思イ/思ッテ」、「シテ」を補うことで、近似的な言い換えが可能であるという事実——を十分に説明することができない。次節では、これらの問題を念頭に置き、より精緻な分析を、SBCGの枠組みを用いて提示する。

⁷ Adjectives-as-nominals.Human 構造を認可する規則として Lyons (1991) によって提案された「形容詞主要部規則 (Adjective Head Rule)」は、その発想において構文文法理論的であり、Fillmore et al. (2012) による分析と類似している。

(i) *Adjective Head Rule*

A string “*the* + adjective” may constitute an NP, understood as human and plural.

(Lyons 1991: 103)

5. 形式的分析

本節では、ここまでにとりあげたスル不在構文および引用動詞不在構文の特徴を踏まえ、これら2構文の分析を論理的意味論および SBCG (Sign-Based Construction Grammar, 記号に基づく構文文法) の枠組みを用いて提示する。

ただし、「付帯状況型」については、「脱落」のないヴァージョンに、すでにイディオム性が強いこと、また、「舞台」「手がかり」「理由」といった、種々の抽象概念を表す名詞群の意味分析の方法に様々な可能性が考えられることから、本稿では形式的分析の対象に含めることは避け、今後の課題としたい。「XヲYニシテ」の形式を持ち付帯状況を表す従属節のイディオム性の高さを示す1つの根拠は、(64)に示されているように、シテを言い切りの形にして主節として用いると座りの悪い文になることである。

- (62) a. ヒロシはバスに乗って会社に行った。
 b. ヒロシは会社に行った。(そのために)バスに乗った。
- (63) a. 梅本は財布を手にして部屋を飛び出した。
 b. 梅本は部屋を飛び出した。(そのとき)財布を手にしていた。
- (64) a. 松田選手は体力の衰えを理由にして引退した。
 b. 松田選手は引退した。(そのとき)??体力の衰えを理由に{した/して
 いた}。

以下、5.1節では両構文の意味解釈に焦点をあて、高階述語論理——個体 (e)、真理値 (t)、可能世界 (w)、時点 (i) に加え事象 (v) および (直接引用された) 言語表現 (u) に対応するタイプを備えたもの——による記述を提示する。続けて、5.2節で SBCG の概要を解説し、5.3節で両構文の統語的・意味的性質を統合的に捉えたモデル化を行う。

5.1. 論理意味論的記述

第2節で触れたように、中止形従属節構文の伝達する意味には、従属節の表す命題 (P_1) と主節の表す命題 (P_2) の論理的連言以上のものが含まれる。本稿では、Oshima (2012) に従い、意味的な観点から中止形従属節構文に3つの下位種を認める。連用形従属節構文・テ形従属節構文には、ともに、(i) 従属節で記述される事象 (E_1) が主節で記述される事象 (E_2) に対して時間的先行または同時の関係を持つことを伝達する場合と、(ii) P_1 と P_2 のあいだに「対比」の修辞関係 (rhetorical relation; Zeevat 2011 など) を参照) を持つことを伝達する場合がある⁸。さらに、テ形従属節構文は、第3の意味として、 E_1 の結果状態が E_2 を時間的に包摂するという、

⁸「対比性」が中止節従属節構文の容認度に与える影響、およびテ形従属節構文の「結果状態」解釈については、Nakatani (2003)、日本語記述文法研究会 (2008)、吉永 (2012) など議論がなされている。

「結果状態」解釈を持つ。これらの3つの意味は、図式的に(65)のように表すことができる⁹。

- (65) (i) 「先行・同時」解釈： $E_1 \leq E_2$
 (ii) 「対比」解釈：**Contrast** (P_1, P_2)
 (iii) 「結果状態」解釈 (テ形従属節構文のみ)：**ResultingState** (E_1) $\supseteq E_2$

ここまで挙げられた例文のうち、(15) – (18), (19a) などが「先行・同時」解釈に相当し、(10a) が「結果状態」解釈に相当する。(66) は、「対比」解釈をうける中止形従属節構文の例である。

- (66) ヒロシはきのう到着し(て)、ケンはおととい到着した。

本稿では、引用動詞不在構文を「先行・同時」解釈を受ける中止形従属節構文の一種と捉え、また、スル不在構文を「結果状態」解釈を受けるテ形従属節構文の一種と捉える分析を提案する。

「先行・同時」解釈および「結果状態」解釈を受ける中止形従属節構文の意味記述を、(67) を例にとって示すと、(68) のようになる。 τ は事象からそれが生起する時間への関数(temporal trace function; Krifka 1992), $\mathbf{RS}(a, b)$ は「 a が b の結果状態(resulting state)である」という関係を表す。また、 \mathbf{TT} はトピック・タイムを意味する。

- (67) ヒロシは帽子をかぶって絵を描いた。

- (68) a. (「先行・同時」解釈)

$$\exists e_2[\exists e_1[\mathbf{put.on.hat}(e_1, \mathbf{hiroshi}) \wedge \tau(e_1) \subseteq \mathbf{TT} \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_2) \wedge \mathbf{draw.picture}(e_2, \mathbf{hiroshi}) \wedge \tau(e_2) \subseteq \mathbf{TT} \wedge \tau(e_2) < \mathbf{now}]]$$

- b. 「結果状態」解釈

$$\exists e_2[\exists e_1[\exists e_3[\mathbf{put.on.hat}(e_1, \mathbf{hiroshi}) \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \mathbf{TT} \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_2) \wedge \mathbf{draw.picture}(e_2, \mathbf{hiroshi}) \wedge \tau(e_2) \subseteq \mathbf{TT} \wedge \tau(e_2) < \mathbf{now}]]]]$$

⁹ E_1 が静的事象(状態)で E_2 が動的事象の場合、 E_1 が E_2 を時間的に包摂する ($E_1 \supseteq E_2$) という関係も可能である。

- (i) a. (今朝)庭にリスがいて、そのことを会社で同僚に話した。($E_1 \leq E_2$)
 b. 曲がり角に大きな岩があって、それに自転車がぶつかった。($E_1 \supseteq E_2$)

一方、 E_1 が動的事象、 E_2 が静的事象の場合、 E_2 が E_1 を包摂するという解釈は許容されない。

- (ii) a. 上司から異動の話聞いて、家に帰ってからも気分が重かった。($E_1 \leq E_2$)
 b. #会長が到着して、すべての役員が出迎えのため1階ロビーに(集まって)いた。($E_1 \subseteq E_2$)
 cf. 会長が到着したとき、すべての役員が出迎えのため1階ロビーに(集まって)いた。

(65-i) に示された分析は、この対比を説明できず、十分な一般性を持つものとは言えない。しかし、本稿では E_1 が動的事象である場合のみを考察することから、簡便のため、この単純化された分析を採用する。

ここでは、Klein (1994) に従い、節によって記述される事象 (E) とトピック・タイムのあいだに以下の関係が成立することが想定されている。

- (69) a. E が動的事象の場合、E はトピック・タイムに包摂される ($E \subseteq TT$)。
 b. E が静的事象の場合、E はトピック・タイムを包摂する ($E \supseteq TT$)。

トピック・タイムへの言及により、たとえば、「ヒロシが1週間前からずっと帽子をかぶり続けており、なおかつ、1時間前に絵を描いた」という状況のもとで、「結果状態」解釈を持たない (70b) が通常真と判断されないことを説明することが可能となる。

- (70) ヒロシは帽子を {a. かぶって / b. # かぶり} 絵を描いた。

ただし、以下では、簡便のため、意味記述におけるトピック・タイムへの言及は省略する。

保持型スル不在構文は、(65-iii) に示された意味を伝達する。(71) の論理の意味は、(72) のようになる。**take.in** は取得をあらわす『スル』に対応する述語であり、事象項の他、取得者、取得される事物、(取得者の) 身体部位に相当する3つの項と結びつく¹⁰。

- (71) ヒロシは赤ん坊を背に散策した。

- (72) $\exists e_2[\exists e_1[\exists e_3[\mathbf{take.in}(e_1, \mathbf{hiroshi}, tx:\mathbf{baby}(x), ty:\mathbf{back}(y)) \wedge \mathbf{stroll}(e_2, \mathbf{hiroshi}) \wedge \tau(e_2) < \mathbf{now} \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_2)]]]$

引用動詞不在構文は、(65-i) に示された時間的意味を含意しつつ、 e_1 と e_2 が時間的に近接しているという情報を伝達する。さらに、言ウ不在構文は、 P_1 と P_2 のあいだに理由関係がない、という情報を伝達する。言ウ不在構文 (73) の意味は、したがって (74) のように記述できる。**say_{dir}** は、直接引用句を選択する『言ウ』に対応する述語である。 \leq は、「(左項が右項に対して) 直前または同時である」という関係を表す。**because** は2つの命題 (可能世界から真理値への関数) のあいだの関係であり、論理式の後半部分は、概略、「ヒロシが t_1 において『おはよう』と言ったからヒロシが t_2 に入ってきた (ただし $t_1 \leq t_2$)」という条件を満たす時点のペア $\langle t_1, t_2 \rangle$ が存在しないことを述べている。なお、本稿では、Dowty (1972), Wierzbicka (1972), Lewis (1973) らに従い、助詞カラ、接続詞 *because* 等によつ

¹⁰ 『スル』が取得を意味する場合、二格名詞句は必須要素であり、空要素で置き換えることはできない。

- (i) 財布を* (手に) した。

これは、『スル』が「変化させる」の解釈を受ける場合にも共通する性質である。

- (ii) 新鮮な卵を* (オムレツに) した。

て表される理由関係（因果関係）は反事実的条件関係の一種（“ p because q ” \approx “If it were not the case that q , then it would not be the case that p ”）であり、したがって事象間ではなく命題間に成立するものとする立場をとる¹¹。

(73) ヒロシが「お早う」と入ってきた。

(74) $\exists e_2[\exists e_1[\text{say}_{\text{dir}}(e_1, \text{hiroshi}, \text{“ohayoo”}) \wedge \text{enter.room}(e_2, \text{hiroshi}) \wedge \tau(e_2) < \text{now} \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_2) \wedge \neg \exists \langle t_1, t_2 \rangle [\text{because}(\exists e_3[\text{say}_{\text{dir}}(e_3, \text{hiroshi}, \text{“ohayoo”}) \wedge \tau(e_3) = t_1], \exists e_4[\text{enter.room}(e_4, \text{hiroshi}) \wedge \tau(e_4) < \text{now} \wedge \tau(e_4) = t_2]) \wedge t_1 \leq t_2]]]$

一方、思う不在構文は、理由関係の有無に関する情報を伝達しない。思う不在構文 (75) の論理的意味は、(76) のようになる。

(75) ヒロシは「まさか」と振り返った。

(76) $\exists e_2[\exists e_1[\text{think}_{\text{dir}}(e_1, \text{hiroshi}, \text{“masaka”}) \wedge \text{look.back}(e_2, \text{hiroshi}) \wedge \tau(e_2) < \text{now} \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_2)]]]$

なお、言う不在構文における「 P_1 と P_2 のあいだに理由関係がない」という情報は、前景的意味 (at-issue meaning, proffered meaning) ではなく、後景化された意味 (not-at-issue meaning, 慣習的推意) として伝達される内容であると考えられる。簡便のため (意味表示の複雑化を避けるため)、ここでは、前景的意味・後景的意味の区分に配慮したかたちでの定式化は行わない¹²。

¹¹ 理由関係の意味に関する研究史については、Sæbø (1991, 2011) による概説がある。

¹² 「後景化された意味」は、前提的なものと、非前提的なものに大別できる (Tonhauser et al. 2013, Oshima 2016)。たとえば、文 (i) は、(ii) に示された3要素からなる意味を持つ。

(i) ケンは、ノーベル文学賞受賞者の川端康成のことも尊敬している。

- (ii) a. **前景的意味**：ケンは川端康成を尊敬している。
 b. **非前提的・後景的意味**：川端康成はノーベル文学賞の受賞者である。
 c. **前提的・後景的意味**：川端康成以外に、ケンが尊敬する人物がいる。

Oshima (2016) で提示された“transjunction”演算子 ($\langle \phi; \psi; \chi \rangle$) を用い、3要素の区分に配慮した意味表示を行うと、概略 (iii-a) のようになる。(iii-b) は、より簡易な近似的な表示である。

- (iii) a. $\langle \exists e_1[\text{respect}(e_1, \text{ken}, \text{kawabata}); \exists e_2[\text{nobel-laureate-in-literature}(e_2, \text{kawabata}); \exists x[x \neq \text{kawabata} \wedge \exists e_3[\text{respect}(e_1, \text{ken}, x)]]] \rangle$
 b. $\exists e_1[\text{respect}(e_1, \text{ken}, \text{kawabata})] \wedge \exists e_2[\text{nobel-laureate-in-literature}(e_2, \text{kawabata})] \wedge \exists x[x \neq \text{kawabata} \wedge \exists e_3[\text{respect}(e_1, \text{ken}, x)]]]$

非前提的・後景的意味が充足されない場合 (例：「ケンはノーベル平和賞受賞者の川端康成を尊敬している」)、文は明確に偽であるというよりは、不適切ないしは奇妙なものと判断される。(ivb) (\approx (27a)) においては、非前提的・後景的意味として「因果関係の不在」が伝達されており、その一方で描写される状況において「因果関係の存在」が自然に推測される——実際、(iva) を因果関係を読み込まずに解釈するのは困難である——ため、奇妙さが生じ

5.2. SBCG とは

SBCG とは、構文文法理論 (Construction Grammar, CxG) の発想を取り入れた形式文法理論である¹³。CxG とは、構文・構造¹⁴を、統語的または語彙的な規則・制約によって実現した単なる表現の配列ではなく、「形式に関わる情報と意味に関わる情報の慣習的な結合」と捉え、これを自然言語における中心的な説明概念とみなす言語モデルである。構文・構造の性質 (文法機能および意味解釈) は、その構成要素となる個々の表現の性質のみによって決定されるのではなく、構文・構造自体の性質によっても影響されるというのが、CxG の中心的な発想である。

CxG は多様なアプローチを包摂するが、SBCG に最も直接的に影響を与えたのは、(言語使用の背景にある認知システムや概念構造よりも) 言語現象自体の正確かつ広範囲な記述に力点を置くという特徴を持つ、Berkeley Construction Grammar (BCG) と呼ばれるモデル (Fillmore 2013) である。SBCG は、その形式的道具立ての多くを HPSG (Head-Driven Phrase Structure Grammar) から継承し、また (77) に示された BCG の基本理念をその設計に組み入れている。ただし、これらの構文主義的発想のうち、(77a-c) は HPSG の初期段階からの特徴であり、またそれ以外のものも Sag (1997), Kathol (2000) などで用いられるヴァージョンの HPSG にはすでに取り入れられている。すなわち、HPSG と SBCG の関係は連続的なものである¹⁵。

- (77) a. 個々の自然言語は、記号 (語だけでなく句や節を含む) の総体として理解される。
 b. 記号は形式 (音韻・形態・文法) 情報と意味情報の結合体と捉えられる。
 c. 記号は、文法によって規定される可能な素性構造 (feature structure) のうち、語彙的・構文的な制約を充足するものを指す。
 d. construction (Cx) とは、形式的・意味的な特徴を共有する記号群を規定する制約を指す。
 e. Cx はネットワークを形成し、より一般的なものとより個別的なものが、

ていると考えられる。

- (iv) a. ヒロシは「太りましたね」と言ってユミを嘖然とさせた。
 b. #ヒロシは「太りましたね」とユミを嘖然とさせた。

¹³ SBCG の成立背景および理論的解説については Sag et al. (2012), Sag (2012), Michaelis (2013) を参照。

¹⁴ (文法用語としての) “construction” に相当する用語として、日本語では「構文」を用いるのが一般的である。しかしながら、CxG における construction は節・文だけでなく、名詞句や、名詞+付加詞といった構成要素にも適用される概念であり、一律に「構文」という用語に置き換えると不自然さが生じる。したがって、本論文では construction に相当する用語として「構文」「構造」を適宜使い分け、また、SBCG において規定された意味での construction (素性構造に対する制約としての construction) を指す際には “Cx” を用いる。

¹⁵ Sag (2010) では、SBCG は “a version of Head-Driven Phrase Structure Grammar (HPSG) integrating key insights from Berkeley Construction Grammar” であると述べられている。

上位・下位の関係を持つ。下位の C_x は、上位のものから文法・意味に関わる制約を継承した上で、さらに個別の制約を受ける。

- f. 文法における中核 (core) と周辺 (periphery) を連続的なものと捉える。

BCG および SBCG においては、(78) に例示されるような、いわゆるイディオムの (例外的) な構造は、(77e) で述べられた意味での、より個別の制約を持つ C_x によって認可されるものと理解される。一方、*some expensive cars, John bought a book, Who does Pat like?* といった標準的な構造は、一般性の比較的高い C_x によって認可される。すなわち、非イディオムとイディオム (あるいは中核と周辺) は明確に対立するのではなく、連続的な尺度をなすものと捉えられる。

- (78) a. Chris lied his way into the meeting. (“one’s way” 構文)
 b. What is your name doing in my book? (“What’s X doing Y” 構文)
 c. The more books you read, the smarter you get. (比較相関構文)

SBCG においては、記号 (sign) および構造体 (construct; 後述) を含むすべての言語的事物 (linguistic object) は素性構造 (feature structure) としてモデル化される。素性構造には、原子的なものと、関数的なものが存在する。原子的な素性構造には、たとえば、名詞句の格を表す値 (*nom, acc, ...*) や、ブール値 (+, -) が含まれる。関数的な素性構造は、属性の集合からそれぞれの値への関数であり、習慣的に AVM (attribute-value matrix) を用いて表記される。記号および構造体は関数的な素性構造として記述される。

言語的事物についての存在論的想定——たとえば、記述・分析の対象となる自然言語に文法的な格の区別があるか、また何種類の格を認めるべきか、に関する判断——に応じ、SBCG の文法モデルはたとえば図 1 のようなタイプ階層を定める (Sag 2012: 178–179)。

それぞれのタイプには、それが充足すべき制約が定められており、上位タイプに課された制約は、下位タイプにも継承される (ただし、デフォルト的制約として課されたものは、下位タイプに継承されないこともありうる)。素性構造が、言語的事物として認定されるためには、タイプ階層内の何らかのタイプに属す (すなわち、そのタイプに当てはまる制約を充足する) 必要がある。(79) は、「記号」、すなわち *sign* のタイプを持つ素性構造に対して設定された制約を、AVM を用いて表したものである¹⁶。これは、記号はすべて——動詞であれ、節であれ、名詞句であれ——PHON(OLOGY), SYN(TAX), SEM(ANTICS) の 3 つの属性に関して、適切な値を持たなければならないことを意味する。

¹⁶ Sag (2012) では、PHONOLOGY, SYNTAX, SEMANTICS に加え形態論的情報に関わる FORM、文脈的情報に関わる CONTEXT、非有界依存関係の表現に用いる STORE の属性を、*sign* の属性として設定している。

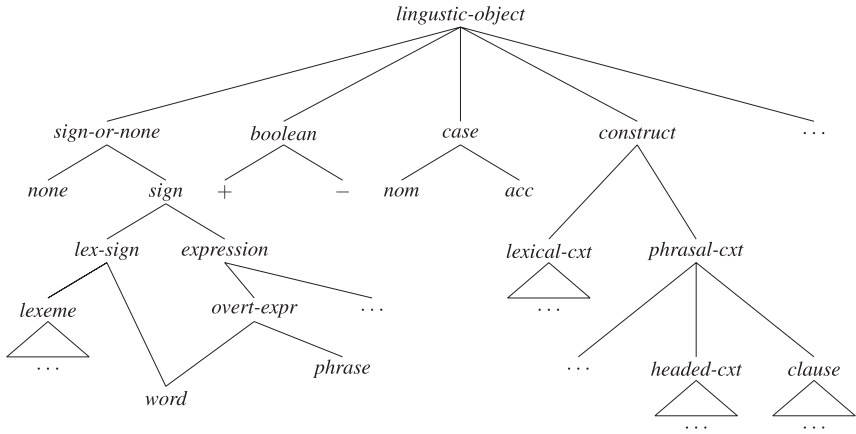


図1 Sag (2012) において想定されるタイプ階層の一部

(79) *sign*: $\left[\begin{array}{ll} \text{PHONOLOGY} & \textit{phon-obj} \\ \text{SYNTAX} & \textit{syn-obj} \\ \text{SEMANTICS} & \textit{sem-obj} \end{array} \right]$

HPSG/SBCG による言語表現のモデルは意味情報を (SEM の値として) 含むが、特定の意味記述の理論には依拠せず、状況意味論、フレーム意味論、あるいは Montague 意味論など、さまざまな枠組みと結びつけることが可能である (Kathol et al. 2011: 82–86)。前述したように、本稿における分析では、意味記述の手段として高階述語論理を用いる。

素性構造を用いた記号のモデル化の一例として、(80) に、英語動詞 *saw* に対応する素性構造を示す。特定のタイプに適用される制約を記述する際と同様、個々の言語的物事を記述する際にも AVM を用いることができるが、記述対象の混同¹⁷を避けるために、後者の場合には AVM は枠に囲んで示される。

¹⁷ たとえば、「名詞が名詞たるために満たすべき条件」と、「名詞という文法範疇に含まれるある表現 (あるいはそのような表現の集合)」は、どちらも抽象的な事物ではあるものの、別個の存在であり、混同されてはならない。

(80)

<i>word</i>											
PHON	/sɔ:/										
SYN	<table border="1" style="border-collapse: collapse; margin: 0 auto;"> <tr> <td style="padding: 5px;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table style="border: none;"> <tr><td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">AUX</td><td style="padding: 5px;">-</td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">VFORM</td><td style="padding: 5px;"><i>fin</i></td></tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">VAL</td> <td style="padding: 5px;"> \langle 1 NP:[<i>nom</i>], 2 NP:[<i>acc</i>] \rangle </td> </tr> </table>	CAT	<table style="border: none;"> <tr><td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">AUX</td><td style="padding: 5px;">-</td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">VFORM</td><td style="padding: 5px;"><i>fin</i></td></tr> </table>	<i>verb</i>	AUX	-	VFORM	<i>fin</i>	VAL	\langle 1 NP:[<i>nom</i>], 2 NP:[<i>acc</i>] \rangle	
CAT	<table style="border: none;"> <tr><td style="padding: 5px;"><i>verb</i></td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">AUX</td><td style="padding: 5px;">-</td></tr> <tr><td style="padding: 5px;">VFORM</td><td style="padding: 5px;"><i>fin</i></td></tr> </table>	<i>verb</i>	AUX	-	VFORM	<i>fin</i>					
<i>verb</i>											
AUX	-										
VFORM	<i>fin</i>										
VAL	\langle 1 NP:[<i>nom</i>], 2 NP:[<i>acc</i>] \rangle										
SEM	<table border="1" style="border-collapse: collapse; margin: 0 auto;"> <tr> <td style="padding: 5px;">INDEX</td> <td style="padding: 5px;">s_1</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">LF</td> <td style="padding: 5px;">$\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\mathbf{see}(e_1, x, y) \wedge \tau(e_1) < \mathbf{now}]]]]$</td> </tr> </table>	INDEX	s_1	LF	$\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\mathbf{see}(e_1, x, y) \wedge \tau(e_1) < \mathbf{now}]]]]$						
INDEX	s_1										
LF	$\lambda y[\lambda x[\lambda e_1[\mathbf{see}(e_1, x, y) \wedge \tau(e_1) < \mathbf{now}]]]]$										
ARG-ST	\langle 1 , 2 \rangle										

(80) では、(i) この記号が語であること、(ii) 音韻形式は /sɔ:/ であること、(iii) 定動詞であり、また助動詞ではないこと、(iv) 主格名詞句 1 つと対格名詞句 1 つを、項として要求すること、(v) L(OGICAL)F(ORM) の値として示された論理表現に相当する意味を持つこと、などの情報が示されている。

SBCG で想定される言語的事物のうち、構造体 (construct, Cxt) は、(i) 屈折 (語彙素から語への実現)、(ii) 派生、および (iii) 複数の語や句の結合による複合的表現の形成、といった記号間の関係をモデル化するものである。構造体は、上位要素 (記号) と下位要素 (記号を元とする、空でないリスト) に対する制約の指定として表される。構造体に課せられる制約は、非構文主義的形式文法における語彙規則および句構造規則に相当する役割を果たす。

最後に、SBCG における構文 (Cx) は、特定のタイプに属する素性構造に対する制約として定義され、一般に以下の形式を持つ。

(81) $T \Rightarrow D$

(タイプ T に属するすべての事物は、素性構造 D に示された制約を充足しなければならない。)

前述したように、タイプ階層においても、それぞれのタイプに属する事物が充足すべき基本的な制約は指定 (宣言) されている。タイプ階層で宣言された制約が文法の基本デザインを定めるのに対し、Cx による追加的な制約は細部の調整 (fine-tuning) を担当するものと捉えることができる。

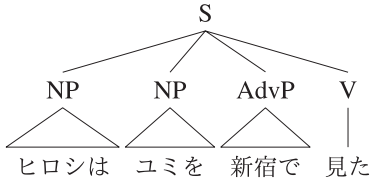
5.3. SBCG によるモデル化

本稿では、日本語の節において、述語 (動詞、形容詞、または名詞 (+ 判定詞))

は、必須補部（項）および随意補部（副詞的従属節を含む付加詞）と、統語的なシスター関係を持つと想定する。すなわち、主語が外項として動詞句と結びつく、あるいは付加詞が動詞句ないし節に接合するとは考えず、(82) のような文は、(83) のようなフラットな構造を持つとみなす¹⁸。

(82) ヒロシはユミを新宿で見た。

(83)



日本語における節一般を認可する構造体が充足すべき一般的な制約として、(84) を導入する。

(84) *clause-construct* ⇒

$$\left[\begin{array}{l} \text{MTR} \\ \text{HD-DTR} \\ \text{DTRS} \\ \text{CX-CONT} \end{array} \right] \left[\begin{array}{l} \textit{clause} \\ \text{SYN} \quad / \boxed{1} ! \left[\text{VAL} \langle \rangle \right] \\ \text{SEM|LF} \quad / \downarrow_{\omega} (\downarrow_{\beta} (\dots (\downarrow_{\psi} (\downarrow_0 (\downarrow_{\alpha} \dots (\downarrow_1)))))) \\ \text{SYN} \quad \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \text{CAT} \quad \textit{predicate} \\ \text{VAL} \quad \boxed{A} \end{array} \right] \\ \text{SEM|LF} \quad \uparrow_0 \\ \text{ARG-ST} \quad \boxed{B} \langle X_1:[\text{LF} \uparrow_1], \dots, X_n:[\text{LF} \uparrow_{\alpha}] \rangle \\ \text{DEPS} \quad \boxed{B} \oplus \langle Y_1:[\text{LF} \uparrow_{\beta}], \dots, Y_n:[\text{LF} \uparrow_{\psi}] \rangle \end{array} \right]$$

(84) は、(85) のような句構造規則——述語の右下に付されているのは必須補部のリスト (valence) である——を一般化したものと考えてよい。M(o)T(HE)R の値はこれらの句構造規則の左辺 (S) に相当し、D(AUGH)T(E)RS の値は右辺に相当する。

¹⁸ 副詞類を付加部でなく、述語とシスター関係を持つ補部であるとみなすことの妥当性については、Bouma et al. (2001) における議論を参照。ただし、以下に示す引用動詞不在構文およびスル不在構文の分析は、日本語における節構造一般に関する特定の想定に依拠するものではなく、適宜調整を施すことで、副詞類を述語句への付加部とみなす立場とも整合性を持たせることが可能である。

H(EA)D-D(AUGH)T(E)R の値は、D(AUGH)T(E)RS の値のなかで主要部となるものを指定している。

- (85) a. $S \rightarrow NP_{[nom]} (AdvP)^* V_{(NP_{[nom]})}$
 b. $S \rightarrow NP_{[nom]} (AdvP)^* Adj_{(NP_{[nom]})}$
 c. $S \rightarrow NP_{[nom]} NP_{[acc]} (AdvP)^* V_{(NP_{[nom]}, NP_{[acc]})}$
 ...

[1] ..., [a] ... は構造共有を示すタグである¹⁹。タグの後に付された“!”は、同一性が、!の右に指定された属性に対してはおよばないことを示す。“/”は、指定された制約がデフォルト的なものであり、その下位タイプに継承されない場合があることを示す。ARG(UMENT)-ST(RUCTURE)は必須補部のリストであり、DEP(ENDENT)SはARG-STに随意補部を加え延長したものである。これらのリスト(およびDTRSリスト)のメンバー間の順序は、斜格性(obliqueness)を反映したものであり、必ずしも音韻的な(あるいは書記上の)線形順序とは一致しない。述語のDEPSの値(リスト)は、原則的にVAL(ENCE)の値と一致するが、ゼロ代名詞(*pro*)など、句構造上実現されない要素(*covert-expression*)は前者にのみ現れ、後者には現れない。

矢印記号は論理表現を変域とするメタ変数であり、同一指標の矢印は同じ値を持つ。矢印の上下は、マザー要素のLFの値(=マザー要素の意味)に現れる変数とそれ以外のものを判別しやすくするためのものであり、実質的な意味は持たない。マザー要素のLFの値における“ $\downarrow_{\beta}(\dots(\downarrow_{\nu}(\downarrow_{\alpha}(\downarrow_{\sigma})\dots(\downarrow_1)))$ ”は、(i)主要部(述語)の意味を順次必須補部の意味に適用し、次に(ii)随意補部(副詞類)の意味を(i)によって得られた意味に適用するという操作を随意補部の数だけ繰り返す、という操作によって得られるものであり、節の中核的な意味に相当する。これに対して、句・節自体によって導入される意味(「構文的な」意味)であるCX-CONT(ENT)(Copestake at al. 2005)の値を適用したものが、マザー要素の最終的な意味となる。

節の一種である平叙節は、(86)に示す構造体(*declarative-clause-construct*)により認可される。*declarative-clause-construct*は、*clause-construct*の下位タイプであり、デフォルト的なものを含めたすべての制約を後者から継承するのに加え、主要部が定形の述語(スル形、シタ形など)であるという制約、および(ii)節の中核的な意味(事象から真偽値への関数)における事象変項を存在量化するという意味操作を導入する。

- (86) *declarative-clause-construct* \Rightarrow

$$\left[\begin{array}{l} \text{HD-DTR} \quad \left[\text{SYN} | \text{CAT} | \text{PRDFORM} \quad \textit{finite} \right] \\ \text{CX-CONT} \quad \lambda P_{\langle \nu, t \rangle} \exists e_0 [P(e_0)] \end{array} \right]$$

¹⁹ [a]のようにアルファベットを用いたタグは、習慣的に素性構造のリストまたは集合に対して用いられる。

declarative-clause-construct に固有の制約と, *clause-construct* から継承される制約をあわせて示すと, (87) のようになる。

$$(87) \left[\begin{array}{l} \textit{declarative-clause-cxt} \\ \\ \text{MTR} \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \boxed{1} ! \left[\text{VAL} \langle \rangle \right] \\ \text{SEM|LF} \quad \downarrow_{\omega} (\downarrow_{\beta} (\dots (\downarrow_{\psi} (\downarrow_0 (\downarrow_{\alpha}) \dots (\downarrow_1)))))) \end{array} \right] \\ \\ \text{HD-DTR} \quad \boxed{2} \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \text{CAT} \quad \left[\begin{array}{l} \textit{predicate} \\ \text{PRDFORM} \quad \textit{finite} \end{array} \right] \\ \text{VAL} \quad \boxed{A} \end{array} \right] \\ \text{SEM|LF} \quad \uparrow_0 \\ \text{ARG-ST} \quad \boxed{B} \langle X_1:[\text{LF} \uparrow_1], \dots, X_n:[\text{LF} \uparrow_{\alpha}] \rangle \\ \text{DEPS} \quad \boxed{B} \oplus \langle Y_1:[\text{LF} \uparrow_{\beta}], \dots, Y_n:[\text{LF} \uparrow_{\psi}] \rangle \end{array} \right] \\ \\ \text{DTRS} \quad \boxed{A} \oplus \langle \boxed{2} \rangle \\ \text{CX-CONT} \quad \uparrow_{\omega}: \lambda P \exists e_0 [P(e_0)] \end{array} \right]$$

(87) に指定された意味構成の過程を (82) に適用した場合, (88) に示された β -変換を経て, (89) の MTR|SEM|LF の値が意味形式として得られる。

$$(88) \lambda P [\exists e_0 [P(e_0)]] (\lambda Q_{\langle v,t \rangle} [\lambda e_2 [Q(e_2) \wedge \mathbf{in}(e_2, \mathbf{shinjuku})]]) (\lambda y [\lambda x [\lambda e_1 [\mathbf{see}(e_1, x, y) \wedge \tau(e_1) < \mathbf{now}]]] (\mathbf{yumi})(\mathbf{hiroshi}))]) \Rightarrow_{\beta} \exists e_0 [\mathbf{see}(e_0, \mathbf{hiroshi}, \mathbf{yumi}) \wedge \tau(e_0) < \mathbf{now} \wedge \mathbf{in}(e_0, \mathbf{shinjuku})]$$

$$(89) \left[\begin{array}{l} \textit{declarative-clause-cxt} \\ \\ \text{MTR} \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \boxed{1} ! \left[\text{VAL} \langle \rangle \right] \\ \text{SEM|LF} \quad \exists e_0 [\mathbf{see}(e_0, \mathbf{hiroshi}, \mathbf{yumi}) \wedge \tau(e_0) < \mathbf{now} \wedge \mathbf{in}(e_0, \mathbf{shinjuku})] \end{array} \right] \\ \\ \text{HD-DTR} \left[\begin{array}{l} \text{SYN} \quad \boxed{1} \left[\begin{array}{l} \text{CAT} \quad \left[\begin{array}{l} \textit{predicate} \\ \text{PRDFORM} \quad \textit{finite} \end{array} \right] \\ \text{SEM|LF} \quad \lambda y [\lambda x [\lambda e_1 [\mathbf{see}(e_1, x, y) \wedge \tau(e_1) < \mathbf{now}]]] \\ \text{ARG-ST} \quad \boxed{B} \langle \text{NP}:[\text{LF} \mathbf{hiroshi}], \text{NP}:[\text{LF} \mathbf{yumi}] \rangle \\ \text{DEPS} \quad \boxed{B} \oplus \langle \text{AdvP}:[\text{LF} \lambda Q_{\langle v,t \rangle} [\lambda e_2 [Q(e_2) \wedge \mathbf{in}(e_2, \mathbf{shinjuku})]]] \rangle \end{array} \right] \\ \text{CX-CONT} \quad \lambda P \exists e_0 [P(e_0)] \end{array} \right] \end{array} \right]$$

上述のように, 本稿では, 中止形従属節を述語の随意補部とみなす。「先行・同時」

解釈を受ける中止形従属節を認可する C_X を, (90) に示す。 *suspensive* は中止形に対応する素性であり, *infinitive* (連用形) および *gerund* (テ形) の上位タイプである²⁰。

(90) *temporal-suspensive-clause-construct* \Rightarrow

$$\left[\begin{array}{l} \text{HD-DTR} / \left[\text{SYN|CAT} \left[\begin{array}{l} \text{PRDFORM } \textit{suspensive} \\ \text{SELECT } \left[\text{SYN|CAT } \textit{predicate} \right] \end{array} \right] \right] \\ \text{CX-CONT} / \lambda P[\lambda Q_{\langle v,t \rangle}[\lambda e_2[\exists e_1[P(e_1) \wedge Q(e_2) \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_2)]]]]] \end{array} \right]$$

次に, 「結果状態」解釈を受けるテ形従属節を認可する C_X を (91) に示す。 *gerund* はテ形に対応する素性である。主要部の ARG-ST は第一要素として主節述語の主語と INDEX の値を共有する *pro* (ゼロ代名詞) を持ち, これによって主語にあたる要素が句構造上に現れず, また主節の主語と同一指示になることが保証される。

(91) *resultingstate-gerund-clause-construct* \Rightarrow

$$\left[\begin{array}{l} \text{HD-DTR} / \left[\text{SYN|CAT} \left[\begin{array}{l} \text{PRDFORM } \textit{gerund} \\ \text{SELECT } \left[\begin{array}{l} \text{SYN|CAT } \textit{predicate} \\ \text{ARG-ST } \langle Z_i, \dots \rangle \end{array} \right] \end{array} \right] \right] \\ \text{ARG-ST } \langle \textit{pro}_i, \dots \rangle \\ \text{CX-CONT} / \lambda P[\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[\exists e_3[P(e_1) \wedge Q(e_2) \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_2)]]]]]]] \end{array} \right]$$

これらの構造体および *declarative-clause-construct* において指定された意味規則により, (92) に対して, (93) および (94) の意味記述を与えることができる。

(92) ヒロシは帽子をかぶって絵を描いた。

(93) 「先行・同時」解釈

a. (\textit{pro}_i) 帽子をかぶって \rightarrow

$$\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[\textit{put.on.hat}(e_1, x) \wedge Q(e_2) \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_2)]]]]$$

b. ヒロシ_i は [(\textit{pro}_i) 帽子をかぶって] 絵を描いた \rightarrow

$$\exists e_0[\exists e_1[\textit{put.on.hat}(e_1, x) \wedge \textit{draw.picture}(e_0, \textit{hiroshi}) \wedge \tau(e_0) < \textit{now} \wedge \tau(e_1) \leq \tau(e_0)]]] \quad (g(x) = \textit{hiroshi})$$

(94) 「結果状態」解釈

a. (\textit{pro}_i) 帽子をかぶって \rightarrow

$$\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[\exists e_3[\textit{put.on.hat}(e_1, x) \wedge Q(e_2) \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_2)]]]]]]$$

b. ヒロシ_i は [(\textit{pro}_i) 帽子をかぶって] 絵を描いた \rightarrow

²⁰ Bloch (1946) に依拠し, 中止形, 連用形, テ形に対応する英語の名称として *suspensive (form)*, *infinitive (form)*, *gerund (form)* を用いる。

$$\exists e_0[\exists e_1[\exists e_3[\mathbf{put.on.hat}(e_1, x) \wedge \mathbf{draw.picture}(e_0, \mathbf{hiroshi}) \wedge \tau(e_0) < \mathbf{now} \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_0)]]] \quad (g(x) = \text{ヒロシ})$$

「主要部不在型従属節規則」に相当する C_x として, (95) – (97) を提案する。(95) におけるマザー要素の $PHON$ の値の制約は, ヲ格名詞句・ニ格名詞句の固定された語順を反映している。“+” は, 音韻情報を左項, 右項の順に連結する操作を表す。(96)・(97) は, いずれも従属節内の引用句が直接引用句の場合を代表例として示しており, 間接引用句の場合を扱うためには異なったバージョンの C_x が必要となる。QuotP は引用句 (quotative phrase) を指す。

(95) 主要部不在型従属節 C_x (保持型スル)

unheaded-possession-resultingstate-gerund-clause-construct \Rightarrow

MTR	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">PHON</td> <td style="padding: 5px;">$\boxed{A} + \boxed{B}$</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">VAL</td> <td style="padding: 5px;">$\langle \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SEM LF</td> <td style="padding: 5px;">$\downarrow_4(\mathbf{take.in}(\downarrow_3)(\downarrow_2)(\downarrow_1))$</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle \mathit{pro}_i : [\mathit{LF} \uparrow_1], \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$</td> </tr> </table>	PHON	$\boxed{A} + \boxed{B}$	SYN	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">VAL</td> <td style="padding: 5px;">$\langle \rangle$</td> </tr> </table>	CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	<i>predicate</i>		PRDFORM	<i>gerund</i>	SELECT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table>	SYN CAT	<i>predicate</i>	ARG-ST	$\langle X_i, \dots \rangle$	VAL	$\langle \rangle$	SEM LF	$\downarrow_4(\mathbf{take.in}(\downarrow_3)(\downarrow_2)(\downarrow_1))$	ARG-ST	$\langle \mathit{pro}_i : [\mathit{LF} \uparrow_1], \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$
PHON	$\boxed{A} + \boxed{B}$																						
SYN	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">CAT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table> </td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">VAL</td> <td style="padding: 5px;">$\langle \rangle$</td> </tr> </table>	CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	<i>predicate</i>		PRDFORM	<i>gerund</i>	SELECT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table>	SYN CAT	<i>predicate</i>	ARG-ST	$\langle X_i, \dots \rangle$	VAL	$\langle \rangle$								
CAT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> <td style="padding: 5px;"></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">PRDFORM</td> <td style="padding: 5px;"><i>gerund</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">SELECT</td> <td style="padding: 5px;"> <table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table> </td> </tr> </table>	<i>predicate</i>		PRDFORM	<i>gerund</i>	SELECT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table>	SYN CAT	<i>predicate</i>	ARG-ST	$\langle X_i, \dots \rangle$												
<i>predicate</i>																							
PRDFORM	<i>gerund</i>																						
SELECT	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%; text-align: left;"> <tr> <td style="padding: 5px;">SYN CAT</td> <td style="padding: 5px;"><i>predicate</i></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">ARG-ST</td> <td style="padding: 5px;">$\langle X_i, \dots \rangle$</td> </tr> </table>	SYN CAT	<i>predicate</i>	ARG-ST	$\langle X_i, \dots \rangle$																		
SYN CAT	<i>predicate</i>																						
ARG-ST	$\langle X_i, \dots \rangle$																						
VAL	$\langle \rangle$																						
SEM LF	$\downarrow_4(\mathbf{take.in}(\downarrow_3)(\downarrow_2)(\downarrow_1))$																						
ARG-ST	$\langle \mathit{pro}_i : [\mathit{LF} \uparrow_1], \boxed{1}, \boxed{2} \rangle$																						
HD-DTR	<i>none</i>																						
DTRS	$\left\langle \begin{array}{l} \boxed{1} \text{ NP:}[\text{PHON } \boxed{A}, \text{ CASE } \mathit{acc}, \text{ LF } \uparrow_2], \\ \boxed{2} \text{ NP:}[\text{PHON } \boxed{B}, \text{ CASE } \mathit{dat}, \text{ MRKG } \langle \mathit{ni} \rangle, \text{ LF } \uparrow_3] \end{array} \right\rangle$																						
CX-CONT	$\uparrow_4: \left(\lambda P[\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[\exists e_3[P(e_1) \wedge Q(e_2) \wedge \mathbf{RS}(e_3, e_1) \wedge \tau(e_3) \supseteq \tau(e_2)]]]]] \right)$																						

(96) 主要部不在型従属節 C_x (言ウ・直接引用)*unheaded-speech-temporal-suspensive-clause-construct* ⇒

MTR	$\left[\begin{array}{l} \text{SYN} \left[\begin{array}{l} \text{CAT} \left[\begin{array}{l} \text{predicate} \\ \text{PRDFORM} \quad \text{suspensive} \\ \text{SELECT} \quad \left[\text{SYN CAT} \quad \text{predicate} \right] \end{array} \right] \\ \text{VAL} \quad \langle \rangle \end{array} \right] \\ \text{SEM LF} \quad \downarrow_3(\mathbf{say}_{dir}(\downarrow_2)(\downarrow_1)) \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \text{pro}:[\text{LF} \uparrow_1], \boxed{1} \rangle \end{array} \right]$
HD-DTR	none
DTRS	$\langle \boxed{1} \text{ QuotP}:[\text{MRKG} \langle to \rangle, \text{LF} \uparrow_2] \rangle$
CX-CONT	$\uparrow_3: \left(\begin{array}{l} \lambda P[\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[P(e_1) \wedge Q(e_2) \wedge \tau(e_1) \preceq \tau(e_2) \wedge \\ \neg \exists \langle t_1, t_2 \rangle [\mathbf{because}(\wedge \exists e_3[P(e_3) \wedge \tau(e_3) = t_1], \\ \wedge \exists e_4[Q(e_4) \wedge \tau(e_4) = t_2]) \wedge t_1 \preceq t_2]]]] \end{array} \right)$

(97) 主要部不在型従属節 C_x (思ウ・直接引用)*unheaded-thought-temporal-suspensive-clause-construct* ⇒

MTR	$\left[\begin{array}{l} \text{SYN} \left[\begin{array}{l} \text{CAT} \left[\begin{array}{l} \text{predicate} \\ \text{PRDFORM} \quad \text{suspensive} \\ \text{SELECT} \quad \left[\text{SYN CAT} \quad \text{predicate} \right] \end{array} \right] \\ \text{VAL} \quad \langle \rangle \end{array} \right] \\ \text{SEM LF} \quad \downarrow_3(\mathbf{think}_{dir}(\downarrow_2)(\downarrow_1)) \\ \text{ARG-ST} \quad \langle \text{pro}:[\text{LF} \uparrow_1], \boxed{1} \rangle \end{array} \right]$
HD-DTR	none
DTRS	$\langle \boxed{1} \text{ QuotP}:[\text{MRKG} \langle to \rangle, \text{LF} \uparrow_2] \rangle$
CX-CONT	$\uparrow_3: \left(\lambda P[\lambda Q[\lambda e_2[\exists e_1[P(e_1) \wedge Q(e_2) \wedge \tau(e_1) \preceq \tau(e_2)]]]] \right)$

これら3つの構造体は、*resultingstate-gerund-clause-construct* および *temporal-suspensive-clause-construct* の下位タイプであるものの、「述語を主要部として持つ」などのデフォルト的制約を継承せず、その意味で特殊性の高い構造体である。句要素における M(A)RK(IN)G 素性は、句の構成要素となる助詞の数、種類、および順序を反映した

リストを値として持ち、例えば ⟨*o*⟩ はヲのみ、⟨*dake, o*⟩ はダケとヲが（この順番で）句内に生起することを意味する。(95) における二格名詞句および (96)・(97) におけるト引用句は、いずれも単一の助詞を持つことが指定されており、これにより「*『失礼します』とだけ部屋を出て行った」のような文が排除される。助詞のリストを値として持つ素性は、(98)・(99) に例示されたような、助詞の接続関係に関わる制約を記述する際にも用いることができる²¹。

- (98) a. ケンだけが来た。
 b. *ケンがだけ来た。
 c. ケンだけに会った。
 d. ケンにだけ会った。
- (99) a. デザートまでも食べた。
 b. デザートさえも食べた。
 c. デザートまでは食べなかった。
 d. *デザートさえは食べなかった。

HPSG/SBCG において ARG-ST 属性は、語および語彙素のみが持つ属性であり、句・節はこれを持たないと想定されることが多いが、ここでは、少なくとも「主要部不在型従属節」は、ARG-ST を持つとみなす。これは、主要部不在型従属節内に照応表現が現れた場合（たとえば、「ヒロシが自分の竹刀を手に立ちふさがった」）の束縛条件を正しく捉え、また、スル不在構文における従属節主語と主節主語の同一指示を記述するために必要とされる措置である²²。

(95) に示された Cxt で指定される意味は、(91) で指定されたものと比べて、意味的な変項の1つが定項で置き換えられているという点でより特定のである。同様に、(96)・(97) に示された Cxt で指定される意味は、(90) で指定されたものと比べて、意味的な変項の1つが定項で置き換えられている点でより特定のである。さらに(96)は、「先行・同時」関係以上の情報を伝えている点でもより特定のである。これらは、(95)を(91)の、(96)・(97)を(90)の、(特殊な)下位タイプとみなす明確な動機となる。

なお、(96)と(97)には共通する部分が多く、say および think の意味を包摂する上位の述語（「外的または内的に言語表象を構成する」）を設けることで、単一の構造体にまとめる——すなわち、統語・意味レベルにおいての「言ウ不在構文」「思ウ不在構文」の区別を認めない——とする立場も可能である（査読者の指摘による）。

²¹ 助詞の連続の中には、明白な統語的・意味的理由から排除されるもの（例：「*ケンがを見た」「*デザートだけでも食べた」）も存在するが、(98b)・(99d) のような組み合わせの不適格性を説明するためには、個別的な共起制約が必要となる。(98)の場合「ガ」と「ニ」はともに格助詞だが、後者のみがダケに前接することができる。(99)の場合、「マデ」と「サエ」は同義のとりたて助詞だが、前者のみが「ハ」に前接することができる。

²² 句要素が ARG-ST 属性を持つ（場合がある）ことを認めることの妥当性・必要性については、Przepiórkowski (2001) における議論を参照。

このような統一的なあつかいの妥当性については、「言ウ不在構文」「思ウ不在構文」の成立する語用論的条件（2.2 節）のより精緻な検証とともに、今後の検討課題としたい。

6. 結語

本稿では主要部となるべき「シテ」「言ッテ」「思ッテ」といった動詞が明示的に現れない特殊な従属節を取りあげ、その性質を論じた。さらに、構文文法理論の枠組みを用い、これらの主要部不在型従属節の文法的・意味的特徴を捉えたモデル化を行った。主要な論点を以下にまとめる。

- (100) a. 「赤ん坊を背に散策した」「『お早う』と入って来た」のような文（スル不在構文・引用動詞不在構文）は、主要部を持たない従属節を含む複文構造である。
- b. 主要部不在型従属節は、明示的な主要部を持つ中止形従属節（「赤ん坊を背にして」「『お早う』と言って」など）と比較して、より特定のな意味を持つ。よって、前者は後者の特殊な下位タイプとみなすことが妥当である。
- c. 主要部不在型従属節は、解釈のために非明示的要素に該当する「先行詞」を文脈中に必要としないという点で、一般的な意味での省略構文とは異なる。これに類似した構造として、英語における Adjective-as-nominal.Human 構造・Adjective-as-nominal.Abstract 構造が挙げられる。
- d. 構文文法理論の枠組みを用いることにより、「音形を持たない（が、句構造上に存在する）主要部」の存在を仮定しない分析が可能になる。

英語の Adjective-as-nominal.Human 構造・Adjective-as-nominal.Abstract 構造と、スル不在型従属節構文・引用動詞不在型従属節には、「(省略を伴わないにも関わらず) 主要部を欠く句 (名詞句/節)」であるという共通点を見出すことができる。日本語、英語、およびそれ以外の言語において、他にどのような「主要部不在型構造」が存在するのか、またそれらに関してどのような一般化が可能かという問題は興味深く、今後の研究の発展に期待したい。

参 照 文 献

- Aelbrecht, Lobke (2010) *The syntactic licensing of ellipsis*. Amsterdam: John Benjamins.
- Arnold, Doug and Andrew Spencer (2015) A constructional analysis for the skeptical. In: Müller (2015), 41–60.
- Bloch, Bernard (1946) Studies in colloquial Japanese I: Inflection. *Journal of the American Oriental Society* 66: 97–130.
- Boas, Hans C. and Ivan A. Sag (eds.) (2012) *Sign-Based Construction Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- Bouma, Gosse, Robert Malouf, and Ivan A. Sag (2001) Satisfying constraints on extraction and adjunction. *Natural Language and Linguistic Theory* 19: 1–65.

- Copestake, Ann, Dan Flickinger, Carl Pollard, and Ivan A. Sag (2005) Minimal recursion semantics: An introduction. *Research on Language and Computation* 3: 281–332.
- van Craenenbroeck, Jeroen (2010) *The syntax of ellipsis: Evidence from Dutch dialects*. Oxford: Oxford University Press.
- van Craenenbroeck, Jeroen and Jason Merchant (2013) Ellipsis phenomena. In: Marcel den Dikken (ed.) *The Cambridge handbook of generative syntax*, 701–745. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Dalrymple, Mary, Stuart Shieber, and Fernando Pereira (1991) Ellipsis and higher-order unification. *Linguistics and Philosophy* 14: 399–452.
- Dowty, David (1972) On the syntax and semantics of the atomic predicate CAUSE. In: Judith Levi Peranteu and Gloria Phares (eds.) *Papers from the 8th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 62–74. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Dubinsky, Stanley and Shoko Hamano (2003) Case checking by AspP. In: McClure (ed.) (2003), 231–242.
- Fillmore, Charles J. (2013) Berkeley Construction Grammar. In: Hoffmann and Trousdale (2013), 111–132.
- Fillmore, Charles J., Russel R. Lee-Goldman, and Russel Rhomieux (2012) The FrameNet construction. In: Boas and Sag (2012), 309–372.
- 藤田保幸 (1988) 「引用論の視界」『日本語学』7(9): 30–45.
- 藤田保幸 (1999) 「引用構文の構造」『国語学』198: 1–15.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』大阪：和泉書院.
- 藤田保幸 (2012) 「引用述語省略説の残映」『國文學論叢』57: 53–69. 龍谷大学.
- 藤田保幸 (2013) 「引用述語省略説の残映、その後」『日本語言語文化』18: 1–18. 龍谷大学.
- 藤田保幸 (2014) 「「発話動詞の潜在」ということ」『國文學論叢』59: 28–56. 龍谷大学.
- Fukushima, Kazuhiko (1999) Bound morphemes, coordination and bracketing. *Journal of Linguistics* 35: 297–320.
- Ginzburg, Jonathan and Ivan A. Sag (2000) *Interrogative investigations: The form, meaning, and use of English interrogatives*. Stanford: CSLI Publications.
- Hoffmann, Thomas and Graeme Trousdale (eds.) (2013) *The Oxford handbook of Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 鎌田修 (2000) 『日本語の引用』東京：ひつじ書房.
- Kathol, Andreas (2000) *Linear syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Kathol, Andreas, Adam Przepiórkowski, and Jesse Tseng (2011) Advanced topics in HPSG. In: Robert D. Borsley and Kersti Börjars (eds.) *Non-transformational syntax: Formal and explicit models of grammar*, 54–111. Malden: Wiley-Blackwell.
- 金賢娥 (2013) 「引用構文における発話動詞の潜在—複文としての分析—」『日本語文法』13(1): 52–67.
- Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. New York: Routledge.
- Krifka, Manfred (1992) Thematic relations as links between nominal reference and temporal constitution. In: Ivan A. Sag and Anna Szabolcsi (eds.) *Lexical matters*, 29–53. Stanford: CSLI Publications.
- Lee, Jungmee and Judith Tonhauser (2010) Temporal interpretation without tense: Korean and Japanese coordination constructions. *Journal of Semantics* 27: 307–341.
- Lewis, David (1973) Causation. *The Journal of Philosophy* 70: 556–567.
- Lyons, Christopher G. (1991) English nationality terms: Evidence for dual category membership. *Journal of Literary Semantics* 20: 97–116.
- Martin, Samuel E. (1975) *A reference grammar of Japanese*. New Haven: Yale University Press.
- McClure, William (ed.) (2003) *Japanese/Korean linguistics* 12. Stanford: CSLI Publications.
- Merchant, Jason (2001) *The syntax of silence: Sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford: Oxford University Press.
- Merchant, Jason (2008) Variable island repair under ellipsis. In: Kyle Johnson (ed.) *Topics in ellipsis*, 132–153. Cambridge: Cambridge University Press.

- Merchant, Jason (2010) Three kinds of ellipsis. In: Francois Recanati, Isidora Stojanovic, and Neftali Villanueva (eds.) *Context-dependence, perspective, and relativity*, 142–192. Berlin: Walter de Gruyter.
- Michaelis, Laura A. (2013) Sign-Based Construction Grammar. In: Hoffmann and Trousdale (2013), 133–152.
- Müller, Stefan (ed.) (2015) *Proceedings of the 22nd International Conference of Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Stanford: CSLI Publications.
- 村木新次郎 (1983) 「地図をたよりに、人をたずねる」という言いかた」渡辺実 (編) 『副用語の研究』 267–292. 東京：明治書院。
- Nakatani, Kentaro (2003) Analyzing *-te*. In: McClure (ed.) (2003), 377–387.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2008) 『現代日本語文法 6』 東京：くろしお出版。
- 日本放送協会「NHK NEWS WEB」<http://www3.nhk.or.jp/news/> [2015年11月アクセス]
- 大島デイヴィッド義和 (2010) 「日本語引用構文における引用述語省略現象」『茨城大学留学生センター紀要』 8: 86–99.
- 大島デイヴィッド義和 (2013) 「引用述語の現れない発語・思考報告文: 「省略」か「構文」か」『茨城大学留学生センター紀要』 11: 113–128.
- Oshima, David Y. (2012) On the semantics of the Japanese infinitive/gerund-clause constructions: Polysemy and temporal constraints. In: Stefan Müller (ed.) *Proceedings of the 19th International Conference of Head-Driven Phrase Structure Grammar*, 292–309. Stanford: CSLI Publications.
- Oshima, David Y. (2015) Ellipsis of SAY, THINK, and DO in Japanese subordinate clauses: A constructional analysis. In: Müller (2015), 157–176.
- Oshima, David Y. (2016) The meanings of perspectival verbs and their implications on the taxonomy of projective content/conventional implicature. In: Mary Moroney, Jacob Collard, Carol-Rose Little and Dan Burgdorf (eds.) *Proceedings of the 26th Semantics and Linguistic Theory Conference*, 43–60. Washington: Linguistic Society of America.
- Oshima, David Y. and Shin-ichiro Sano (2012) On the characteristics of Japanese reported discourse: A study with special reference to elliptic quotation. In: Isabelle Buchstaller and Ingrid van Alphen (eds.) *Quotatives: Cross-linguistic and Cross-disciplinary perspectives*, 145–171. Amsterdam: John Benjamins.
- Payne, John and Rodney Huddleston (2002) Nouns and noun phrases. In: Rodney Huddleston and Geoffrey K. Pullum (eds.) *The Cambridge grammar of the English language*, 323–523. Cambridge: Cambridge University Press.
- Przepiórkowski, Adam (2001) ARG-ST on Phrases. In: Dan Flickinger and Andreas Kathol (eds.) *Proceedings of the 7th International Conference of Head-Driven Phrase Structure Grammar*, 267–284. Stanford: CSLI Publications.
- Pullum, Geoffrey K. (1975) PEOPLE DELETION in English. In: *Working papers in linguistics*, 172–183. The Ohio State University.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Sæbø, Kjell Johan (1991) Causal and purposive clauses. In: Arnim von Stechow and Dieter Wunderlich (eds.) *Semantics: An international handbook of contemporary research*, 623–631. Berlin: De Gruyter.
- Sæbø, Kjell Johan (2011) Adverbial clauses. In: Klaus von Heusinger, Claudia Maienborn, and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning 2*: 1420–1441. Berlin: De Gruyter.
- Sag, Ivan A. (1997) English relative-clause constructions. *Journal of Linguistics* 33: 431–484.
- Sag, Ivan A. (2010) English filler-gap constructions. *Language* 86: 486–545.
- Sag, Ivan A. (2012) Sign-Based Construction Grammar: An informal synopsis. In: Boas and Sag (2012), 69–202.
- Sag, Ivan A., Hans C. Boas, and Paul Kay (2012) Introducing Sign-Based Construction Grammar. In: Boas and Sag (2012), 1–29.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』 東京：くろしお出版。
- 寺村秀夫 (1983) 「付帯状況」表現の成立の条件—「X ヲ Y ニ……スル」という文型をめぐる—」『日本語学』 2(10): 38–46.

- 寺村秀夫 (1992) 「付帯状況」表現の成立の条件—「XヲYニ……スル」という文型をめぐって—『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』113–126. 東京:くろしお出版. 寺村 (1983) の再掲.
 東京新聞「TOKYO Web」<http://www.tokyo-np.co.jp/> [2016年4月アクセス].
 Tonhauser, Judith, David Beaver, Craige Roberts, and Mandy Simons (2013) Toward a taxonomy of projective content. *Language* 89: 66–109.
 Wierzbicka, Anna (1972) *Semantic primitives*. Frankfurt: Athenäum.
 吉永尚 (2012) 「テ形節における統語的考察」『園田学園女子大学論文集』46: 113–123.
 Zeevat, Hank (2011) Rhetorical relations. In: Maienborn, Claudia, Klaus von Heusinger, and Paul Portner (eds.) *Semantics: An international handbook of natural language meaning* 1: 946–968. Dordrecht: Walter de Gruyter.

執筆者連絡先:

[受領日 2015年9月8日

〒464-8601

最終原稿受理日: 2016年11月27日]

愛知県名古屋市千種区不老町

名古屋大学人文学研究科

e-mail: davidyo@nagoya-u.jp

Abstract

Japanese Subordinate Clauses without a Head: The Non-occurrence of DO, SAY, and THINK

DAVID YOSHIKAZU OSHIMA

Nagoya University

This paper addresses special kinds of Japanese subordinate clauses which lack an explicit head predicate but are similar in interpretation to clauses headed by a suspensive form of *suru* 'do', *iu* 'say', or *omou* 'think'. I discuss that these unheaded constructions are subject to certain syntactic and semantic constraints that do not apply to their headed counterparts, and develop a formal analysis within the framework of Sign-Based Construction Grammar, aiming to model these constraints without postulating a covert element in the place of the missing predicate.